

各関係機関の長 殿

鹿児島県病害虫防除所長

令和4年度技術情報第10号（施設野菜の菌核病）について（送付）



12月の調査で施設野菜の菌核病が平年より多く発生しており、被害の拡大が懸念されます。ほ場をよく観察し、早期防除に努めてください。

なお、本情報は、病害虫防除所ホームページ（www.jppn.ne.jp/kagoshima）にも掲載しています。

令和4年度 技術情報第10号

1 対象病害虫 菌核病

2 対象作物 キュウリ、メロン、トマト、ミニトマト、ピーマン、ナス、イチゴ、サヤインゲン

3 発生状況

- (1) 12月の発生ほ場率はキュウリでは23%（平年12%）、トマトでは46%（平年5%）と平年より高かった（図1、図2、表1）。
- (2) 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より低いと予報され、施設内で結露が発生しやすくなり、今後も発病しやすい条件が続くと予想される。

4 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 地中の菌核から子嚢盤を形成し、その表面に子嚢ができ、その中にできる子嚢胞子が飛散して植物体に感染する。
- (2) 子嚢胞子は17～20℃前後の多湿条件で感染しやすいので、ハウス内の通風換気に努める。
- (3) 外気温10℃以下の日が数日続くと、発生は多くなる。
- (4) 主な伝染源である子嚢胞子は、春まで飛散するので、天候に注意し、予防散布に努める。
- (5) 病原菌は活力の衰えた花びらや枯葉、芽かき後の傷口、枝分岐部付近から感染しやすいので、薬剤は対象部位へ十分かかるように散布する。
- (6) 同一の作用特性を有する薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- (7) 適切な肥培管理により植物体が過繁茂にならないようにする。
- (8) 発病株や発病部位（花卉、枝葉、果実等）は周辺株や健全部及び次作の伝染源となるので、菌核を生じないように直ちに取り除き、ほ場外へ持ち出し処分する。
- (9) 収穫終了後の残さはほ場外に持ち出す等、適正に処分する。

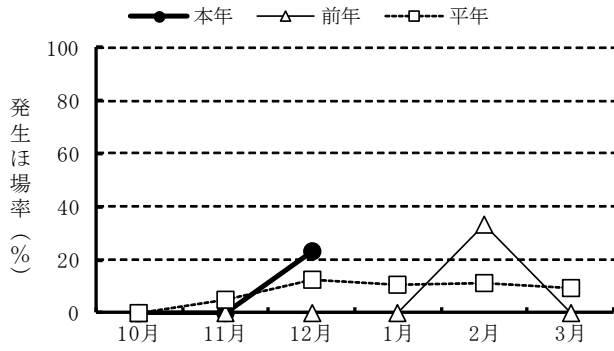


図1 キュウリ菌核病の発生ほ場率

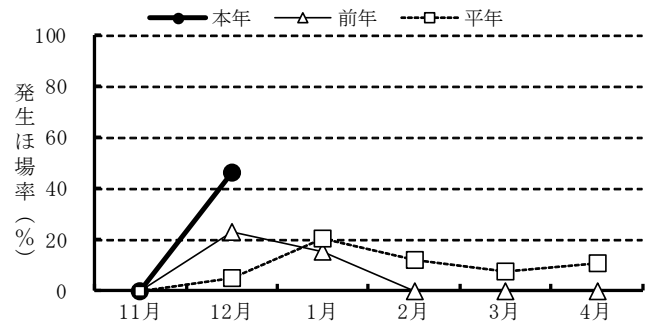


図2 トマト菌核病の発生ほ場率

表1 施設野菜の菌核病発生ほ場率(12月)

作物名	発生ほ場率(%)		発生量
	本年	平年	
キュウリ	23	12	やや多
トマト	46	5	多
ピーマン	0	4	やや少
イチゴ	0	0	並

【参考】



地面に形成された子のう盤



発病したキュウリ果実



発病したイチゴ果実